

令和元年6月20日現在

機関番号：24501

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2017～2018

課題番号：17H06682

研究課題名（和文）現代共同体論－エティエンヌ・バリバルを中心とするフランス語圏思想

研究課題名（英文）Contemporary Community Theory: Etienne Balibar and Francophone Philosophy

研究代表者

太田 悠介（OTA, Yusuke）

神戸市外国語大学・外国語学部・准教授

研究者番号：70793074

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は現代フランスの思想家エティエンヌ・バリバルを中心として、現代フランス語圏の共同体論を考察した。アルジェリア戦争後、ポスト・コロニアル時代に入ったフランスにおいて、多様な出自をもつ住民からなる移民社会の実相にふさわしい共同体像が要請され、バリバルらの共同体論はこれに応答するものであった。このように、本研究は思想と社会の両面から共同体論の地平が構成されていったことを考察し、その成果を論文、口頭発表、翻訳を通じて公表した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究ではフランス語圏の現代思想において重要な位置を占める共同体をめぐる議論を考察した。アルジェリア戦争期以降のポスト・コロニアル時代のフランスという歴史的なパースペクティブを設定することによって、思想と歴史、また思想と社会の交点において、エティエンヌ・バリバルを中心とする共同体論が生まれてきたことを明らかにした。そして、近年広く関心を集める移民社会としてのフランスについて、その形成の過程を多角的な観点から跡づけ、この社会が直面する実践的な課題の背景を浮かび上がらせた。

研究成果の概要（英文）：This study examined contemporary community theory in France, primarily focusing on French contemporary philosopher Etienne Balibar. The study showed that some French and Francophone thinkers elaborated their community theories in France entering its postcolonial period following the end of the Algerian War. It also revealed that these community theories corresponded to an aspect of the French society, i.e. the immigration society. Investigating philosophical debates about the community and its historical and social implications in French society, this study published research results as research paper, conference presentation and translated article.

研究分野：思想史

キーワード：エティエンヌ・バリバル 共同体 移民社会 人種主義 ナショナリズム

1. 研究開始当初の背景

現代フランスの共同体論の嚆矢としてしばしば言及されるのは、20世紀末の共産主義体制の崩壊とほぼ時を同じくして登場したジャン＝リュック・ナンシー(1940-)の共同体論である。宗教、民族、文化といった共同体をまとめ上げる何らかの核を想定し、その同一性によって共同体を定義する従来の共同体論とは異なり、異質な者同士が「共にある」ことに共同体の本質を見出すその主張は、フランス現代思想の分野において大きな注目を集めた。

本研究はこうした共同体をめぐる従来のフランス現代思想の流れを踏まえたうえで、次のような二つの観点からさらに考察を深める余地があると考えた。まず、ナンシーと同時代の思想家を扱うことによって、現代フランス語圏の共同体論の地平を広げて考察することである。とりわけ思想史と政治哲学の分野で共同体に関連する論考を発表しているエティエンヌ・バリバール(1942-)を軸として、現代フランス語圏における共同体論の広がりを検討するという視点である。

次に、同一性に依拠しない共同体という現代フランス語圏の共同体論の方向性については、移民問題や宗教問題といった同時代の政治・社会状況との関わりという観点からも、より詳細な検討を必要とするという点である。本研究がとりわけ着目したのは、移民社会フランスという第二次大戦後の状況を視野に入れて、思想と社会の接点を探ることであった。このように、第二次大戦後のマグレブ地域(アルジェリア、チュニジア、モロッコ等)を中心とする旧仏領植民地からフランスへと向かう移民現象を扱うことで、必ずしもフランス本土の議論だけには限定されない共同体論の地平を視野に入れることを意図していた。

以上のような背景をもとに、本研究課題「現代共同体論 - エティエンヌ・バリバールを軸とするフランス語圏思想」に着手した。

2. 研究の目的

本研究が目指したのは、現代フランスを代表する思想家のひとりであるエティエンヌ・バリバールの思想を中心に置き、フランス語圏で1980年代末から現れた共同体論を考察することである。そして、思想家のテキストの精読を通じ、思想の内実を検討することにくわえて、そうした思想を生み出すに至った思想家を取り巻く社会的な背景をも同時に視野に入れて考察を進めることである。このような観点に立つ本研究は、それゆえ思想史研究としての成果を挙げることを目指す。

前述のナンシーに代表される従来の共同体論をめぐることは、ソビエト連邦を中心とする旧共産主義体制の崩壊が重要な歴史的な指標となってきた。本研究はこの点をおさえつつ、フランスの植民地帝国の終わりを告げたアルジェリア戦争(1954-1962)以降の歴史的・社会的状況に注目した。フランスはこの時代に植民地の消失と旧植民地出身者の本土への流入が引き起こした住民の多様化・混在という新たな状況に直面するが、本研究はこれをフランスにおけるポスト・コロニアル時代の到来として検討することを目指す。これによって、ソビエト連邦の崩壊を始点とする現代フランスの共同体論の視座を相対化し、またそれから距離をとることを意図していた。

バリバールの思想形成にあたっては、アルジェリア戦争期のテキストから今日の共同体論へとつながる要素がすでに現れているという経緯もあり、これをフランスにおけるポスト・コロニアル状況と重ね合わせて検討することが必要であった。その結果、アルジェリア戦争期からポスト冷戦時代へと至る長期的な時間軸のなかで、フランス語圏の共同体論を捉え直すという本研究の基本的な視座が定まった。

3. 研究の方法

本研究は上記の研究目的を達成するため、1年半の期間内に以下の方法を採用して研究を進めた。

第一に、『暴力と市民性』(2010)や『世界』(2012)といった2000年代以降の最近年の著作を含めたエティエンヌ・バリバールの思想の全般的な読解を行い、これを共同体論という観点から新たに整理し直すことである。

第二に、旧仏領植民地出身者を中心とするフランス本土への移住という移民現象に光を当て、アルジェリア戦争以降のフランスのポスト・コロニアル状況を考察することである。

第三に、思想と社会をそれぞれ直接の対象として扱うこれら第一と第二の方法を統合するかたちで、思想と社会の両面からフランス語圏の共同体論というトパスを明らかにすることである。

本研究では、思想家の思想形成に社会の変化がどのように作用するのかという点、そしてこの点と反対のベクトルとなる思想家が社会情勢にどのように関与するのかという点を詳細に検討する。換言すれば、思想と社会が互いにどのように影響を与え合うのかという相互作用

を重視するという視点である。

バリバルを中心とするテキストについては、初年度内に著作と論文集、またこれらに収録されていない雑誌・新聞等に掲載された論文やインタビューなどを包括的に検討する。近年増えつつあるバリバルに関する研究書、研究論文も同時に検討する。フランス語圏のこれ以外の論者の著作などについても、共同体論に関連するものについては収集し、並行して検討する。関連資料の収集、分析のために、国内の大学図書館を利用するとともに、フランス国立図書館（パリ）での短期調査を行う。研究期間の後半期にはそれまでの調査の結果をまとめ、これを随時公表する。

4. 研究成果

2017年度（2017年9月以降）の研究成果は以下の通りである。

まず、バリバルの思想については、前年度（2016年度）に台湾国立交通大学の招聘を受けた行った口頭発表《Europe as a vanishing mediator. Courage of Etienne Balibar's Philosophy》を改稿した。本論文は翻訳を経て、同大学の紀要に発表された。本論文はバリバルの共同体論について、近年その思想において次第に重要性を増しつつあるヨーロッパ概念との関連から読み解いたものである。

次に、フランスのポスト・コロニアル状況に関しては、移民現象を専門とするフランスの歴史家ジェラルド・ノワリエル（1950-）の近年の仕事をもとめた講演「社会における歴史の役割」を翻訳した。同翻訳は公益財団法人日仏会館の会誌『日仏文化』に発表された。なお、年度末にフランス国立図書館での資料調査を予定していたが、所属機関の変更などの諸事情から次年度に延期し、すでに収集が終わっていた基礎文献の考察を進めることでこれに代えた。2017年度は以上のように、共同体論について、そのサブ・テーマにあたるヨーロッパ論（バリバル）と移民社会論（ノワリエル）というふたつの方向から考察を深め、展開した。

2018年度は以下の研究成果を得た。

まず、第43回社会思想史学会（東京外国語大学）において、セッション「資本主義と人種主義 - 『人種・国民・階級』から30年」を開催した。バリバルとアメリカの社会学者にして世界システム論の代表的な論者であるイマニュエル・ウォーラーステイン（1930-）の共著『人種・国民・階級 - 曖昧なアイデンティティ』（1988）の刊行30周年を記念して、酒井隆史氏（大阪府立大学）、佐藤嘉幸氏（筑波大学）を招聘し、同著の現代的な意義を再考するセッションである。

セッションに先立って、バリバルとウォーラーステインの両名が2018年に同著を振り返って語ったインタビュー映画「交差する視線 - 『人種・国民・階級』をめぐる30年後の対話」（チャールズ・ヘラー、ロレンツォ・ペッツァーニ監督）を字幕付きで上映し、セッションの射程をさらに広げるように努めた。セッションにおいては、その狙いを明らかにする提題を担当するとともに、「エティエンヌ・バリバルと政治 - 人種主義の分析から移民社会の共同性へ」と題する口頭発表を行った。

本発表では、『人種・国民・階級』におけるバリバルの人種主義（レイシズム）の批判的な分析が、移民社会の多様な民衆層が混在した共同性の擁護へとつながる点を明らかにした。現代世界における人種主義の浸透を視野に入れたうえで、共同体がしばしば分断と排除と結びつくことを踏まえながら、それとは別様の共同体の構想がバリバルのうちにあることを詳細に分析することができた。そして、社会思想史学会ホームページに本セッションの内容をまとめた報告書を掲載した。また、年度の後半には2017年度から延期していたフランス国立図書館での資料収集および調査を短期で実施し、研究課題のさらなる拡充を図った。

上述のように、1年半の期間を通じて、バリバル思想の考察、そして戦後フランスのポスト・コロニアル状況の考察のいずれの側面についても、一定程度の成果を得ることができた。社会思想史学会での口頭発表およびセッション報告書は、これら両側面を総合し、現代フランス語圏の共同体論という本研究課題のまとめに相当するものであった。思想と社会という別個の現象を同時に考察するという本研究の性格上、それぞれの領野における具体的な成果にはさらなる整理が求められる多様な要素が含まれる。今後は現代フランス語圏の共同体論という本研究課題のパースペクティブのもとにこれらの要素をより一貫したかたちで提示することが必要となる。これについては今後、単著として公表する予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計1件）

太田 悠介、『ヨーロッパ作為一個消失的中介：艾提安・バリバル（Etienne Balibar）哲學的勇氣、林士鈞訳、『文化研究季刊』、No.159、2017年。』

<https://www.csat.org.tw/Journal.aspx?ID=22&ek=120&pg=1&d=1670>

〔学会発表〕(計2件)

太田 悠介、エティエンヌ・バリバールと政治 - 人種主義の分析から移民社会の共同性へ、第43回社会思想史学会、2018年。

太田 悠介、セッション「資本主義と人種主義 - 『人種・国民・階級』から30年」提題、第43回社会思想史学会、2018年。

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕(計0件)

〔その他〕(計2件)

(翻訳)ジェラルド・ノワリエル、社会における歴史の役割、太田 悠介訳、『日仏文化』、87巻、2018年、pp.32-37。

(学会セッション報告書)

太田 悠介、資本主義と人種主義 - 『人種・国民・階級』から30年、2019年。
<http://shst.jp/wp-content/uploads/2019/03/2019sessionI.pdf>